

私立大学の使命

小宮 一仁

日本では高校の新卒就職者数と 4 年制大学の新卒就職者数が 1998 年に逆転し、2019 年には前者が約 18.6 万人であるのに対し後者が約 44.7 万人になっています。大学卒が高校卒の 2.4 倍になっていますが、残念ながら大卒者でなければできない仕事が増えているわけではありません。つまり、大学生を人手不足を補うマンパワーと考え、大学生が大学で学んだ専門性を無視し、企業の都合のいいように使っている現状も、日本の生産性を下げる原因になっています。

私は、グローバル化とは、仕事の核が人の移動から情報の移動に変わっていくことだと思っています。世界中どこにいても仕事ができるようになります。大航海時代や産業革命の時代に、交通網が発達して、貿易や流通が盛んになり、人や物やお金が世界中を移動するようになり、これが人々の仕事になりました。グローバル化された情報社会では、人が移動しない社会に戻るのです。ただし、自分達で食べるものを定住地の土地を耕して収穫していた農業社会とは違います。

例えば、製造業ならば、日本に居ながらにして、世界中を工場にして物をつくることができるようになります。実際、私が大学生だった 1985 年には日本製品の 97%以上が日本国内で作られていました。しかし、今では 25%以上の日本製品が海外の工場で作られています。現在日本ではものづくりに従事している人が就業者の約 3 人に 1 人とされています。人工知能やロボットの進化によって、30 年後にはそれが 10 人に 1 人に減るだろうとされています。ですから、これからは、人が行う仕事は、益々少数精鋭の高度なものに変わってゆきます。

中国やインドのような、今まで経済のグローバルな競争に参加していなかった世界人口の約半分が競争に加わって来ました。競争参加者が一挙に増え、世界中のほとんど全ての人が競争に参加するようになりました。日本では人口が減り続けますから、ひとりひとりの生産性を上げないと生産力を維持できません。つまり、これからは、国力や企業の力が国や人の豊かさを決めるのではなく、人の能力が国や人の豊かさを決める時代になります。だから、今こそ、人の能力を高める教育が必要です。ICTが飛躍的に発展した現代社会は、何かが絶対に正しい、何かが絶対に間違っている、という決め方で物事が解決していた過去の時代の社会とは全く異なります。コンピューターに触れたこともなく、それを使ったこともない時代の人々の言うことや方法は、断片的な知識としては役に立ちますが、現代社会における課題を解決する本質にはなり得ません。

常に変化し続けるこれからの時代では、多様性が大切になります。このような時代の大学は、今すぐに役立つ人材を養成

しても意味がありませんし、そういう教育をいくら行ったとしても社会貢献に資する成果を出すことはできません。変わりゆく時代では、すぐに役立つ人材はすぐに役にたたなくなるからです。

国公立大学は納税者のお金で運用されていますから、その時の納税者の平均的なニーズにあった人材を育成するのが使命です。だから、国公立大学では長期的なことは考えられません。一方、私立大学は建学の精神の実現が目的であり、建学の精神は未来もずっと変わりませんから、長期的なことを考えることができます。建学の精神に基づいて、独自の教育、研究を行うのは私学の権利であり、それを実現することは義務なのです。そして、私立大学にとっては、建学の精神を実現するための教育や研究を行うことこそが社会貢献です。既に私立大学は、日本の大学生の四分の三を教育して人材を送り出すといった公共財を提供しているのですから、それだけでも十分に社会貢献の責任を果たしているのです。

令和2年12月25日

